

10 アクセント

「アクセント」ということばの意味するところはさまざまである。1)「芸術作品等で、ある印象を与えようとして、とくに強調したポイント」2)「ことばの“訛り”のような特徴」3)「ある言語の個々の語について、意味のまとまりを示すため、社会習慣的に定まっている相対的な高さまたは強さの配置」などがあげられるが、言語学で日本語のアクセントについて述べようとする場合は、3)の意味で用いられる。

ただし、主として標準的日本語のアクセントに関してより厳密に言えば、「語」は「アクセント節」(事実上「文節」に該当)に、強さではなく「高さの配置」とする必要がある。また、「社会習慣的」の意味範囲も単純ではなく、「地域」、「年令層」、「職業集団」等により体系的に、もしくは部分的に異なる例も見られる。

10.1 機能

「アクセント」の第1の機能としてあげられるのは、言語一般に当てはまるのであるが、「統語論的機能(文法的な働き)」である。どこからどこまでが語のまとまりであるかを示す機能のことであって、そのまとまりが呼気の切れ目以外に、声の高さや強さの配置によって示される。高さで表す方を「高さアクセント(pitch accent)」、強さで表す方を「強さアクセント(stress accent)」という。

第2の機能としては「音韻論的機能(意味を識別する働き)」がある。同じ音節連続(一音節が一単語の場合は同一の音節)であってもアクセントによる高さや強さの配置の違いによって意味の違いを表わすというもので、これを「音韻論的に有意味な高さ(または強さ)アクセント」であるという{例： $\bar{\text{ア}}$ メ(雨)、

アメ(飴)。ただし、この機能は前述の機能とは違って全ての言語に備わっているというわけではない。

日本語(東京共通語)のアクセントの場合、第1の機能はもちろんであるが、第2の機能もある。また、多くの語が2音節以上で構成されている「多音節語」の言語である。中国語のような「音節アクセント」ではなく、「単語アクセント」であり、「高さの配置」で識別するため「音韻論的に有意味な単語高さアクセント」であるということが出来る。この諸条件を図示すれば次のようになる。

日本語アクセントの位置関係

統語論的機能	高さアクセント	日本語の 福島、栃木、茨城、宮崎方言など	
		音韻論的機能	音節⑦ 中国語、ベトナム語など
		単語⑦ 東京共通語など	
	強さアクセント	英語、ロシア語など	
フランス語、ポーランド語、チェコ語など			

(⑦=アクセント)

統語論的機能は全ての言語のアクセントに備わっている。高さもしくは強さのある音節を中心としてどこからどこまでが意味のまとまりであるかを示す。

統語論的機能はあっても音韻論的弁別機能は持たないアクセントの言語もある。そのような場合には、いずれの単語も同一のアクセント形式を備えていることから、単音連続が同じなのにアクセントによって意味が異なるなどということはない。たとえば強さアクセントのフランス語は、一部の外来語などによる例外を除けば常に語末の音節が強い。チェコ語はどの語も第1音節が強いという点で共通している。朝鮮語のソウル方言なども同様に音韻論的弁別機能はもたない。

日本語の方言の中においても、福島、栃木、茨城、宮崎の各県、それに山形、宮城、福岡、熊本各県等の一部で用いられているアクセントは、アクセントそれ自体による意味の弁別機能をもたず「無核アクセント」、「一型式アクセント」、「無型アクセント」などと呼ばれるものがある。